講　演

舞踊学の展望

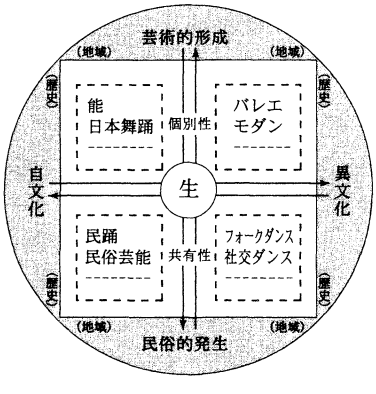
松本千代栄

「舞踊学の動向」(1978,「舞踊学」創刊号所収)では，先行研究（日本体育学会研究発表及び原著論文題目　昭27～51，及びアメリカ主要大学の学位論文，Xerox Univ. Micro films 所収1940～1973）を中心に，CORD，Research Quarterly，Ethnomusicology，Journal of Physical Education and Recreation などの機関誌を加え，舞踊研究の現状を文献上に概観した。(日本の近代以降，近世までの舞踊研究の足跡は板谷徹氏が執筆されている)舞踊学会が設立５年にして漸く「舞踊学」刊行にいたった，いわば『舞踊学』の樹立を目指す出発の時であった。

今回は「舞踊学の展望」という課題をいただき，舞踊を愛し，注目する一人として，「学」としての充実の未来に期待し，菲才をお許しいただいて，展望の眼を馳せたい。

先ず「学」の対象としての「舞踊」をどうとらえるか――。言うまでもなく舞踊は，地球上の歴史（時間）と地域（空間）の中に，基層社会のモラルを反映しつつ，生成・発展と衰退，更に新たな生誕を繰り返し，絶えることなく継続してきた。

図１は縦枠に歴史（時間），横枠に地域（空間）をおき，その時間・空間に発生した民俗的発生が，やがて個の意識の目覚めと共に，個の表現として，感情を内包した芸術的形成に至る舞踊文化の特質を示し（縦軸），更にこれらが自地域を越えて，相互に他を摂取し，交流する，文化間コミュニケーションを合せみている（横軸）。これらの交錯する時間・空間に成長と衰退の弁証法を繰りかえす，限りない舞踊の出現と様式的形成を大別し例示している。図の底流（地）には，好み，思考，探索，収集，分類，実践・実験，創出などの人智が働いており，また自然環境や他の社会文化の働きかけ



も含まれてい。「学」の対象としての舞踊は，人間の「生」の根元の本質への思索と共に，これらすべての現象性の顕在を擁するものとみたい。

これらの「学」の展望にあたって，ここでは先ず，大学における研究に価する対象として，「ダンス」を大学カリキュラムに位置づけたウィスコンシン大学 Wisconsin Univ. を中心にみてみよう。

マーガレット　ドウブラー Margaret N. H'Doubler は1918年，パフォーミンググループをウィスコンシン大学に創始し，1921年には，アメリカで初めてダンス専攻のコースを設けている。1927年に修士課程，1963年には博士課程 Ph. D Degree of Dance が設置され，ここから全米の大学にダンスの研究・教育の拠点がひらかれていった。（因みに日本の国立大学に舞踊学講座がおかれたのは1963年，舞踊教育学修士課程がおかれたのは1973年である。）

1940年，M. ドウブラーは主著 “Dance: a creative art experience” を出版。(訳出，松本「舞踊学原論」'74）論的研究の提出として際立つ著作であり，今日もダンスの哲理とししして評価されている。生物学，化学を主専攻に，哲学を副専攻とした M. ドウブラーは，大学の要請をうけて舞踊研究を志し，コロンビア大学修士課程に進学後，ウィスコンシン大学にもどって，上述の専攻課程，学科を発足，充実させた。その成果を踏まえての著作とみるとき，本著は，大学における研究に価する対象として，舞踊を「学」たらしめる最初の立証であったとみられよう。

M. ドウブラーの言う “運動の中に投影し，運動を通して投影した情動的，知的な感情形式としての舞踊” は，生命の根源に芸術のシンボル――その形式の内包をみようとした思想，例えばランガー S. K. Langer の “Feelling and Form” 1953 や “Dynamic image” 1957にさきがけるものであり，「学」としての舞踊の哲学的思考を動機づけたものともみられよう。

勿論，M. ドウブラーの「学」としての接近は，同時代，あるいは，前後に提出された舞踊に関する論考をその背景としてみなければならない。即ち，人類学の知見ではフレイザー James George Frazer の原始の舞踊のフィールドワークの成果 “The Golden Bough” 1922があり，ボアーズ Franz Boas の “Primitive Art” 1927では原始文化から芸術の形式要素が読みとられている。

また文化史的には，ルース　ベネディクト Ruth Benedict の“Patterns of culture”1934があり，歴史的には，世界史的概観を行ったクルト　ザックス Curt Sacks の“World History of Dance”1937がある。

また，原論としては，M. ドウブラーも学んだ J. デューイ John Dewey の“Art as Experience”1934が出版されている。

更に視点を転じると，J. マーチン John Martin は“American Dancing”1936，“Introduction to the Dance”1939で舞踊の情報・評論によって芸術家の演に注目し，Artist としての達成（芸術学）は，イサドラ　ダンカン Isadora Duncan の“My life”1927をはじめ，ハンヤ　ホルム Hanya Holm の“Mary Wigman”1935，ニジンスキー Romola Nijinsky の“Nijinsky”1935など，著作上に芸術観と業績が明らかにされている。

また，舞踊の形式論としては，ルイス　ホースト　Louise Host の“Pre-classic Dance Forms”1937によって表現の様式論が出され，著名なラバン Rudolf von Laban は Dance の Scientist として，動きの構造を体系化している。舞踊の運動学の提出ともいいうるものであろう。

M. ドウブラー自身も，“Rhythmic Form and Analysis”1932として分析的研究を試みている。

ここに事例として掲げた舞踊の文献上の諸業績は，大学のカリキュラムにも反映し，ウィスコンシン大学の舞踊研究課程についてその内容をみると，『舞踊――動きを通しての芸術研究は，哲学・科学・諸芸術の分野をふくむ』とし，その研究は『身体の技術的分析，美学的な形式の原理，伝達の媒体としての動き，舞踊教育学，舞踊工学（照明，音楽，動きにされた動作，振付演技，伴奏，舞台制作などの原理），舞踊哲学，舞踊史，舞踊評論舞踊セラピィなどをふくんでいる。……』（同大学案内1963）と掲げられ，研究の視点と学としての細分化，その確立の方向を概要上に読みとることができよう。

眼を転じよう。舞踊学の展望のためには，論理的追究の他方に，新しい動きや表現を求めた実践原理と成果（個性と作品）にも眼を注がなければならないだろう。

ダルクローズ Emile Jacques Dalcroze の The Earhythmics やボーデ Rudolf Bode など人間の動き自体の形成を目ざした運動教育は，“はずみ”や“振動”など動きの流れを重視し，そのリズムと自然性の志向によって動きの芸術につながった。

デルサルト Franecois Delsarte は心身の調和と表現性に着目。更に，D. ハンフリー Doris Humphrey の“fall と recovery”，M. グラハム Margha Graham の“Contration と release”など，優れた芸術家がのこした動きの性格（個性）の発見をあわせて，動きの性格への注目は，動きがいかに限りなく内部感情を横溢させるものとできるか，いわば，身体の知の把握の一として注目される。

この意味では，I. ダンカンの自然性は勿論，M. ヴィグマンの群舞の独自性の発見は，装飾的集合体としての集団ではなく，個を超えた思想，感情の表現，即ち知の語彙としての群――人間の間身体性の発見として注目すへぎであろう。

群の性格は，モダンダンスが，思想，感情，感覚の表現として成立しうる重要な要因である。表現運動学としての動きの学の新領域を予見できるものかもしれない。

目を転じて，同時代の日本の諸学の中の舞踊を垣間みよう。伝統的文化の研究をのぞいては，その所産は少なく，蘆原英了，中村秋一らの舞踊に関する貴重な識見と著作は別として，例えば，芸術心理学講座全５巻（芸術作品，芸術の創作，芸術教育，芸術と人間，芸術心理学）1958においても，表現活動は，文学，絵画，音楽，芸術，演劇，映画，服装を対象として論述され，舞踊の項は掲げられていない。労作「美学事典」（昭36）にも舞踊は未だ位置を得ていない。舞踊は，その価値観とともに，運動現象としての現象性の故にとらえにくく，文化としては愛されつつも学の対象と認められず，「学」としてその特質と表現を確かにされることは殆どなかったとみられよう。

> 因みに舞踊学会設立は，これらの現状を踏まえて「舞踊学」をおこす願いをもち，特に「シンポジウム」の企画は，会員及び会員外の学識を得て，舞踊の論争を興し，舞踊学の樹立への歩みを確かにしたいという提案であった。提案者としては，将来ヴィジョンとして，舞踊哲学，美学，舞踊社会学，舞踊心理学等，また，国際的な視野と識見をいかし，実践をもふくめて“舞踊学”の専門的知見を集成し，「舞踊」を冠した，「○○学」としての刊行に近づきたいという念願からであった。

しかし，現象学，記号論や情報理論の論考の進む中で私自身は，新教育思想に注目し，また長く，木村素衛，植田寿蔵らの美の思索に惹かれてきた年月の中で，とりわけ中井正一の映像の時間構造への洞察に啓発された。「舞踊」の実在が世に注目されるのはこれからであろうとひそかに期待した。

さて，最後に，松本自身が求めた舞踊研究にふれ，この講演の役割のしめくくりとしたい。手がけた研究の一つは，運動現象として消え去る舞踊――「虚の実在」を平面上に明らかにする――実験美学の試みである。遠くに舞踊の楽式論 coda の検出を望んでいた。

この研究の第一歩は，冒頭に示した図式の自文

化，異文化の交流の中に生まれた各舞踊運動現象とその基底の情調をみる研究的接近からはじまった。一つは「舞楽」'69，「白石踊」'72，「樫立踊」'72，チョウ CHHAU（インド）'82など民族的表現特性の解析。他の一つは，人間発達と創作表現の特性への研究的接近である。これらは，人間の普遍性と独自性に着目し，各々の独自の様相と共に，独自の中に共有される普遍の潜在を求める——いわば共通感覚を実証することの試みであった。“ひと流れの動きに生命あり——と”みた，自身の直観的感覚を確かめることでもあった。舞踊教育学の核を求めるものでもあった。

本日ごらんいただく「運動の質と感情価」（16ミリ film）の研究1985は，上記の直観的把握——最小限の動きにも潜在する感情価を明らかにすることで，舞踊の核となるものを認知しようという考えで出発し，実施を進めた。

研究の設定は，大別して用語と動きの２つの分野の先行研究に依拠している。

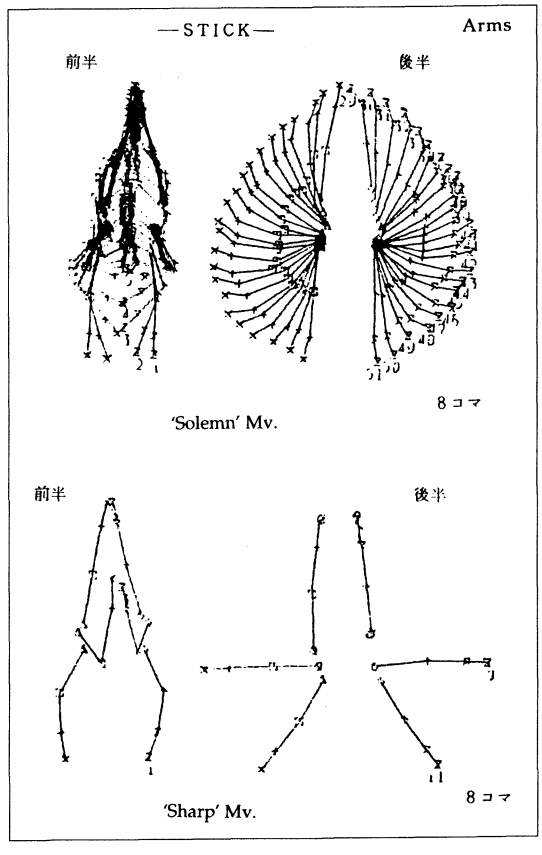
一つは，舞踊用語の収集分類に関する研究，「舞踊用語に関する研究Ⅱ・Ⅲ」'69～'81，「舞踊鑑賞価基準作成について」'71などがあり，これらを踏まえて，本研究の感情価を測るチェックリストが作定された（３種－①運動の型，②運動の質，③情調をみる）。例えばチェックリスト②では，抽出された形容語42語を７領域に分類し，感情価（鑑賞価）の異りを弁別できるようにしている。（表省略）多くの絵画や音楽の鑑賞価の研究には６領域の結果が示されているが，“身体運動”をもって行われる表現としては，人間の「存在」自体がすでに「表現的存在」であるとみるとき，その基点を日常的な，あるがままの身体としてとらえるべきと考え，７領域を設定した。他の表現研究と異なる特色であろう。

他の一つは，動きと感情のかかわりをみる実践実験研究である。即ち「舞踊の創作鑑賞能力の発達に関する研究」'65では“激しい風が吹く”という創作課題の３年間の追跡とその作の鑑賞によって，“激しい”という感情価が鑑賞者に共有されることを実証した成果があり，また「動きの感情価に関する研究」'72として，動きの一部を変えることで全体の印象（感情価）が変わることを実験上に確かめるなど，運動表現と言語表現の間に一定の結びつきの方向が認められることを明らかにしてきた。

これらをうけて，７領域の動きは，日常歩行に最も近い歩行（しかし，自然な美的統御がある）と深呼吸のような両腕の上挙測開の動きとを定め，これを原型（proto type）とし，原型の特質を保ちつつ，時間，力，空間の形態を左右に３種ずつ，感情のひろがりを予想して変形し，７種の Motives を定めた。各 Motives はメトロノーム音で速度表示し，映像上の可能性を考慮して，動きを作定した。

実験 film は，ナック Motion Analyzer によって各 Motives の動きの特性を解析，検出（図２参照）。同時に Film の鑑賞を行ってチェックリスト及び自由記述によって感情価を確かめ，更にこれらの Motives からどのような表現が生まれうるか，学生の演をもって例証している。

図２



また，７Motives からどのような舞踊主題が連想されたか，題名の７領域の分散（調査結果）も示している。（表１参照）

研究の総括的結果としては，７種の動きと７領

表１　「舞踊主題の連想」—7Motives より　（各Motive 4分の連想時間）

順位＼連想例＼Mrs.	Happy	Flowing	Lonely	Natural	Solemn	Sharp	Dynamic
	（語数）134語	105語	101語	106語	136語	120語	103語
1 位群	春の訪れ	私は風	誕生と死	無	祈りの時	機械文明	飛　翔
2 〃	一面の花	流れゆく…	閉じた心	日々	神への讃歌	ロボット	大　空
3 〃	讃　歌	花　畑	芽ばえ	我道を行く	大　地	戦い	光り輝くとき
4 〃	雪	ロンド	大　地	私の歌	時を超えて	挑　戦	迫　力
5 〃	祭　典	恋する乙女	花開く	歩く	深　海	針	行け
6 〃	楽しい…	夢みるものは	静　寂	流れゆく時	生きる	鋭い刃	歓　喜
7 〃	光をうけて	春の海	樹　海	人々	やわらかい空気	兵士の行進	今・生きる
8 〃	陽気な子供	水　玉	後　悔	平凡に	天地創造	樹　氷	河をとびこえろ
9 〃	草原に遊ぶ	螺　旋	女流詩人	死の道	心のつぶやき	都　会	あこがれ
10 〃	心はずんで	優しさの	涙の詩	目覚めの時	悲しみを負って	突きさす	追いかけて
他	空いっぱい	生命の泉	もう一つの顔	生の神秘	献　身	迫りくる何か	明日は
	虹を渡る	白いドレス	耐える	宇宙の無限	とらわれの民	掟	仲間とともに

域の感情語群の連合は，統計的に有意差を示し，その妥当性が認証された。

僅か2小節にあたるような小単位の動きの流れが，それ自体で個別の感情価を内包し，それぞれ異なる感情域を形成する小宇宙であることを検証できたことは，先行研究にはみられない，初の実験検証であった。

“7 Motives——動きとイメージの連合の範疇”（松本）と名付けている。

実験研究結果は，原著論文“Qualities of Movements and Feeling Values”（IAPESGW 報告書 '85　p,185～204）として掲載。後，補追を加え，㈳日本女子体育連盟研究概要 '87に報告している。また，これらの追跡研究（宗京，桜井，松本）も行っている。

本日上映の映像（16ミリフィルム）は，IAPESGW 会議 '85の報告後，帰国して研究の概要（研究データ）と共に，再収録したものである。

Film 上映；
研究者　松本：「運動の質と感情価」'85㈳日本女子体育連盟制作，TBS 映画社協力
演：お茶の水女子大学舞踊教育学科学生

ハイテクノロジーの急速な発展に向かう現在，運動現象としての舞踊文化の実験・実証的解明は三次元の世界をもとらえて，より多くの可能性をもって進められるだろう。

諸学の分化と統合の中に，舞踊に対するより豊かな研究的接近がひらかれ，みのりをもたらすことを期待し，この「舞踊学の展望」を終えたい。

＊この原稿は，講演概要をもとにして，このたび松本千代栄が新たに作成したものです。

＊1985年秋季第20回舞踊学会